

大阪大学図書館報

Vol.29 No.4 March, 1996 (平成8年) 通巻121号

目次

- 附属図書館の重要課題～本館の新築～
- インターネットによる情報発信のすすめ
- 本館施設の現状と将来構想
- 教官著作寄贈図書・会議・日誌

附属図書館の重要課題 本館の新築

林 毅

大阪府でも、郊外ではうぐいすの声が聞かれる頃となり、いよいよまた暖かい春がめぐってきました。まもなく豊中キャンパスには例年通り桜がきれいに咲き誇り、新入生諸君が入学して大学の雰囲気は一段と明るく活性化してくることでしょう。この機会に、全学の教職員、学生の皆様に附属図書館本館の現状についてお話し、ご理解とご支援を頂きたいと思えます。

さて、大阪大学は今や、日本を代表する最も有力な総合大学の一つとなっておりますが、残念なことに、その大阪大学にふさわしくない施設が一つ存在しています。それが附属図書館本館です。

附属図書館本館には質量共に充実した学術資料が所蔵されており、またそこでは有能で熱心な職員が仕事をしていますが、極めて残念なことに、本館の建物は著しく老朽化した上に、その面積が文部省の定めた基準面積の約50%しか

ないというみじめな状態になってしまっています。そのため業務の正常な運営に支障が生ずると共に、利用者の皆様には多大のご不便をおかけする有様となっているのです。

例えば、年々増加する図書、雑誌等学術情報資料の収蔵スペースが決定的に不足しており、各部局に公用貸出された学術資料の返却もお断りせざるを得ない状態に陥っています。そのため、貴重な学術資料が部局においてダンボール詰めされている例も見受けられます。また、閲覧のスペースや座席も少なく、学習や研究活動の環境は決して良いとは申せません。

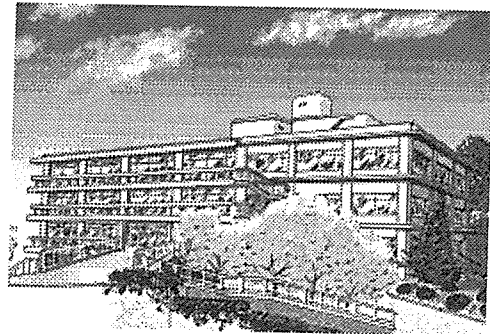
新しい時代に対応したサービス活動も、施設面での制約から十分に行えないという状況もあります。

附属図書館本館は、豊中キャンパスのみではなく、大阪大学全体の中央図書館としての機能を有しており、生命科学と吹田の二つの分館、

及び各部局の図書室におけるサービスや業務の連絡調整あるいは統括という役割を担っております。こうした重要な役割を担い、大阪大学における学術情報の蓄積・流通の中核となるべき本館が、施設の面では非常に貧弱であるという現状は、まさに一日も早く克服されなければならないと言えるでしょう。

そこで附属図書館としては、本館の新築を是非とも早く実現致したく、全学の皆様のご理解とご支援を切にお願いする次第であります。

(附属図書館長・法学部教授 はやし たけし)



本館施設の現状と将来構想

湯 浅 富士夫

沿革と現状

本館は、昭和35年度に第1期工事が完成して以来、41年度に第2期、47年度に第3期56年度に第4期と4度にわたる増築工事を経て、約9,500㎡の現在の建物が完成しました。第1期の施設完成から36年、最後の第4期の書庫増築から15年を経ております。

この間、蔵書数は飛躍的に増加し、例えば、第4期の書庫増築当時に約110万冊であった豊中地区の蔵書は15年後の今年には1.5倍の約170万冊になっています。これらの蔵書は、本館のほか理学部、基礎工学部の両図書室その他各学部の資料室及び研究室に収蔵されていますが、いずれもほぼ満杯状態です。本館の収蔵能力は101万冊と算定されており、余力は僅か数万冊しかありません。

施設の狭隘化は、閲覧者に対するサービスの低下ももたらしています。現在、本館の座席数は約860ですが、そのうち約20%にあたる170は閲覧室や書庫から離れた自習室のもので、この自習室を含めても座席は不足しており、試験期には特に深刻です。したがって館内で落ちついて調査や研究をしたりするような、大学図書

館らしい環境・雰囲気がありません。

また、情報化の進展に伴う電子機器の増加や国際化や生涯学習の普及など時代の動きに伴うサービス展開に対応することが極めて難しくなっています。

このほか、施設の老朽化に伴う問題点が種々ありますが、ここでは説明を省略させていただきます。

こうした現状から、附属図書館にとって本館施設の新築は緊急の課題となっているのです。

将来構想

附属図書館では次のような機能を有する図書館の構築を目指して、新築の実現を図りたいと考えています。

新営構想の七柱

- 1) マルチメディア・ライブラリーの実現
 - (1) マルチメディア（文字・映像・音声の一体的処理を可能とする）を活用した情報サービスを行う。
 - (2) インターネットその他広域ネットワークを活用した情報サービスを行う。

- (3) 学内LANを活用した情報サービスを行う。
- (4) 学内LANを活用した迅速な業務処理を行う
- (5) 特色あるデータベースを形成し提供する。
- 2) 研究図書館機能の強化
- (1) 研究環境を整備し、研究者の「仕事場」(研究個室、研究者コーナー、研究資料の整備)を提供する。
- (2) 研究活動との調和をはかりつつ、適切な研究資料の集約を行って共同利用を推進するとともに、予算の効率的運用により収集資料のタイトル数を増やす。
- (3) 夜間の開館時間を延長するとともに、休日開館も拡大する。
- (4) IDカードによる研究者の図書館利用を実現する。
- (5) 特別コレクション、マイクロフィルム資料、貴重図書、新着学術雑誌等の閲覧のため快適な閲覧室を整備する。
- 3) 共通教育の積極的支援
- (1) シラバスと密着した資料を整備する。
- (2) 外国語学習用の機器及び資料を整備する。
- (3) 図書館での文献検索法、文献入手法に関するオリエンテーション、講習会等を企画、実施する。
- (4) グループ学習室、視聴覚学習室を整備する。
- 4) ドキュメント・デリバリー・システムの整備
- (1) 学内における文献配送システムを整備する。
- (2) 電子ジャーナル等全文データベースの導入と学内LANによる提供サービスを行う。
- 5) 計画的・効率的な資料収集による蔵書の鮮度の維持
- (1) 高額資料の共同購入・共同利用を推進する。
- (2) 資料購入費の安定的確保を図るとともに、重複資料をできるだけ削減し資料の質的充実を図る。
- 6) 保存図書館機能の整備
- (1) 大阪大学附属図書館全体の保存図書館として位置づけ、効率的保存を図る。
- (2) 貴重な資料のマイクロフィルム化など代替保存を計画・実施する。
- (3) 資料保存のための適切な設備を整備する。
- 7) 開放型図書館機能の強化
- (1) 生涯学習社会に対応して一般市民へのサービスを充実する。
- (2) 留学生、外国人研究員等に配慮したサービスの充実を図る。
- (3) 身体障害者にやさしい図書館づくりをする。

附属図書館では、こうした構想を実現するためには、単に新しい施設を建設すれば良いとは考えておりません。新しい器には新しい酒を盛るための努力が必要です。即ち、7本の柱を支えるためには次のような筋交いが必要と考えています。

- 1) 事務組織の見直し、再編による業務処理の効率化
- 2) 予算の安定的確保及び効率的執行
- 3) 業務、サービス、施設管理の自動化の推進
 - (1) 自動入退館チェック・システム
 - (2) 自動貸出・返却システム
 - (3) コンピューターによる利用案内
 - (4) 自動搬送装置
- 4) 省エネルギー・システムの導入
 - (1) 太陽エネルギー、雨水の活用
 - (2) センサーの活用(照明、水道、冷暖房、ドア)

(附属図書館事務部長 ゆあさ ふじお)

インターネットによる情報発信のすすめ

大川 剛直

昨年はインターネット元年と言われているらしい。確かに、テレビや一般雑誌で日常的な話題の1つとして取り上げられ、新聞には専用のコラムが常設されるなど、日本においてインターネットが大いに脚光を浴びた1年であった。書店の店頭には入門書をはじめとする多数の関連書籍が、人気作家の小説と同じような扱いで平積みになされ、いまやインターネットという言葉を目にしたことがない人は皆無といっても良いくらいに(少なくともその名前に関しては)人々にとって非常に身近なものとなっている。

元来、インターネットとはその名前の通り、ネットワークを結ぶためのネットワーク、すなわちデータ通信網の相互接続を意味するものであった。このような試みは、4つの研究機関を結び、1969年に運用を開始した機関間ネットワークARPANETに端を発する。ARPANETの当初の目的は、有時に備えた資源の分散にあり、その名は米国国防総省の高等研究計画局(Advanced Research Projects Agency)の支援のもと開発が進められたことに由来する。このARPANETを母体とし、さまざまな機関を結びながらワールドワイドなコンピュータネットワークに発展したものが、現在、インターネット(the Internet)と呼ばれているものの実体である。今日では、およそ140ヶ国に跨る巨大なネットワークとなっており、利用者数は4000万人とも5000万人とも言われ、その裾野は益々広がりがつある。

このような昨今の爆発的なインターネット普及の原動力となったのが、広域情報システムWWW(World Wide Web)と、そのための情報検索・提示ソフトウェアMosaicの出現である。その是非は別として、「インターネット = WWW」といった誤った図式がまかり通るくらい、その影響は極めて多大である。WWWはス

イスのCERN(ヨーロッパ素粒子物理学研究所)において、研究者間の情報共有を目的として考案されたもので、ネットワークを前提としたハイパーテキスト環境として特徴づけることができる。ハイパーテキストの仕組みを用いることによって、テキスト内に仕掛けられたリンクを辿るだけで、関連する情報をネットワーク経由で参照できる。

一方、Mosaicはイリノイ大のNCSA(National Center for Supercomputing Applications)によって開発された情報ブラウザであり、WWWにマルチメディアインタフェースを提供する。簡単なマウスの操作で、ネットワーク上で公開されている情報提供サーバ間を縦横無尽に行き来することができ、しかも、通常のテキスト形式の情報だけでなく、音声、静止画、動画などのマルチメディア情報も、同様の感覚で取り扱うことができる。WWWの普及に拍車をかけた画期的なソフトウェアである。

ところで、インターネットを新聞、テレビ、書籍、雑誌などの各種メディアと比べた場合、最大の相違点として、情報発信が容易であることが挙げられる。この特徴を活かし、情報発信の大衆化、すなわち個人による情報発信への道を切り開いたことが、インターネット、あるいはWWWがもたらした最大の功績ではなかろうか。その意味では、情報発信なしにインターネットの有効利用はあり得ないと言い切ることができるだろう。例えば、研究者が研究成果をインターネットを使って情報発信することの利得は、とくに海外に対するcirculationを考えた場合、図り知れないものがある。また、大量の実験データや、プログラムなど、物理的制約ゆえに従来のメディアでは公開できないような情報も、インターネットを使えば容易に相互利用可能とな

る。公開した情報がきっかけとなって、突然の講演依頼が舞い込んだり、海の向うからリアルタイムで論文に対する問い合わせが来たりするのも、インターネットによる情報発信ならではの言えよう。



図1：情報システム工学科のホームページ

WWWによる情報発信は、とくに凝ったことを考えなければさほど難しいものではない。WWWで提供するドキュメントは、HTML (Hyper Text Markup Language) と呼ばれる言語を用いて作成される。HTMLでは、文字の修飾、ドキュメントのレイアウトなど、ドキュメントの見栄えを良くするための設定や、ドキュメント間の関連づけのためのリンク先の指定が、タグと呼ばれる特殊な記述を用いて簡単に行なえる。もちろん、ある程度決まった文法規則があるため、それに則った形でドキュメントを作成する必要があるが、慣れてしまえば小学生でも作成できる程度のものである。

WWWのドキュメントにおける表紙の役割を果たすのが、ホームページと呼ばれる部分であ

る。WWWによる情報発信を考えた場合、まず、その第一歩として自分あるいは自分が所属する組織のホームページを作成することになる。ホームページはとくに完成された姿をイメージしなくても、随時更新できるので、できるところから作成していけば良い。このあたりのとっつきの良さも、WWWの普及に一役買っているであろう。ホームページができれば、あとは提供したい情報を集め、電子化してファイルに保存する。それらをリンクを使って結んでいくだけで、マルチメディアのドキュメントがとりあえず完成するわけである。

参考までに、筆者が所属する工学部情報システム工学科のホームページ(1996年3月現在のもの)。URLは <http://www.ise.eng.osaka-u.ac.jp> を図1に示す。図からわかるように、基本的には学科の概要に関するページや研究室のホームページへのリンクから成っている。各研究室のホームページは、それぞれの研究室の責任のもとに作成されている。

情報システム工学科では、学科における研究活動を広く知らせることを目的として、ISE (Information Systems Engineering) Technical Report という名称の(通常の印刷物としての)不定期刊行物を発行しているが、その全文(一部はアブストラクトのみ)をWWW上で公開している(図2)。これも学科のホームページから辿って見ることができる。なお、ここに紹介したページは完成されたものではなく、日々アップデートされていることを申し添えておく。

新聞、雑誌などの記事では、「ネットサーフィン」とか「WWWサーバクルージング」と言う言葉をよく目にするように、インターネットの特徴として、必要な情報が居ながらにして自由に検索・収集できる面だけが強調されているきらいがある。しかし、これまで述べてきたように、インターネットの真骨頂は利用者が情報消

費者に留まるのではなく、誰もが手軽に情報生産者になれることを可能にした点にある。今後ますます発展し、超巨大化するネットワークの中において、魅力的な情報、すなわち世界の人々に注目される情報をいかに提供するかが、一層重要になってくるであろう。

幸いにして大阪大学では、ATMベースの高速なキャンパスネットワークODINSが整備され、運用されている。わずかな機器を揃えるだ

けで、情報発信する環境を構築することができる。もちろん、ある程度の設備投資や技術力が要求されるが、十分それに見合うだけの価値は見出せるはずである。大阪大学のアクティビティを世界に向けてアピールし、延いては国際的貢献をも可能とする最も手軽でかつ効果的なメディアとして、インターネットを積極的に導入し、活用されることをおすすめしたい。

(工学部 講師 おおかわ たけなお)

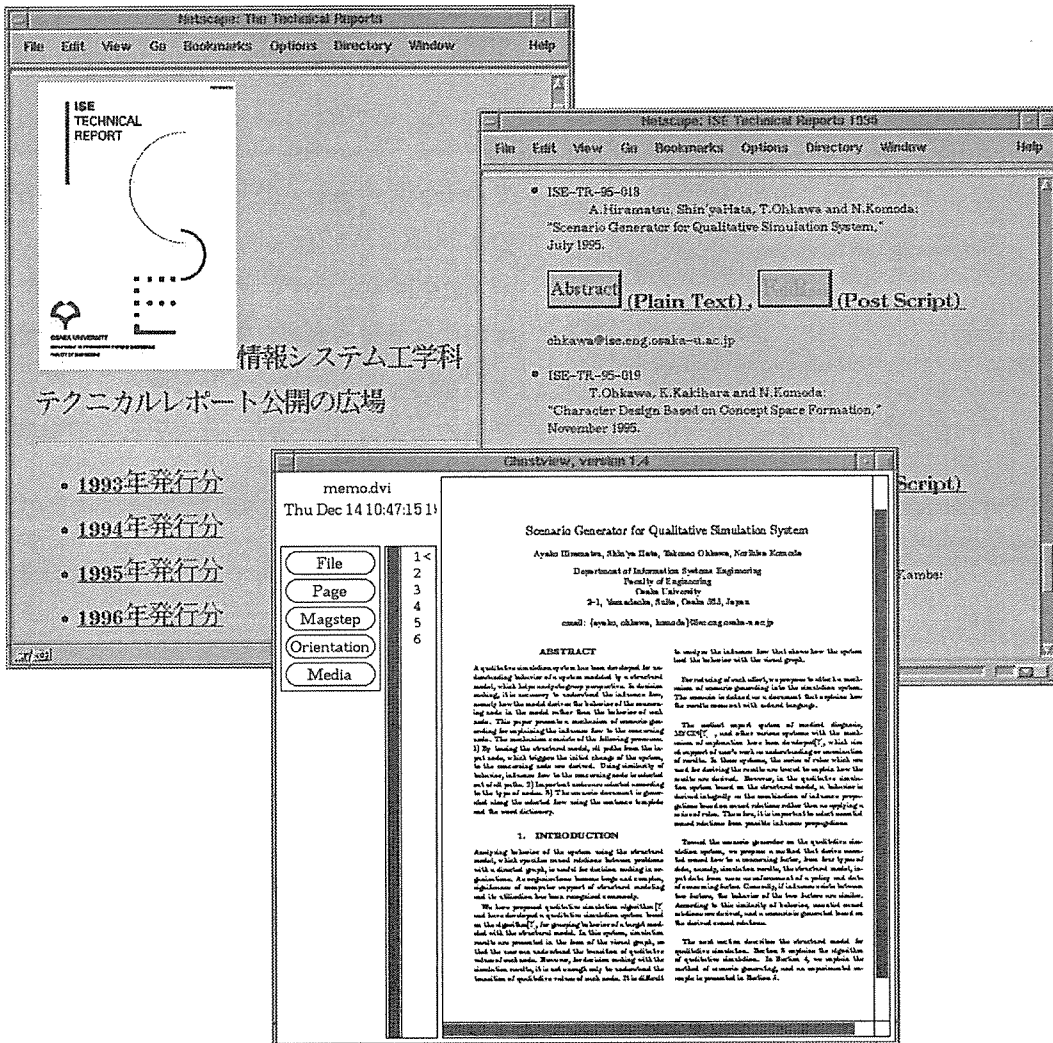


図 2 : ISE Technical Report

お 知 ら せ

大阪大学附属図書館のホームページが開設されました。URLは次のとおり。

<http://www.library.osaka-u.ac.jp/>

■■■■■ 教官著作寄贈図書 ■■■■■

—— 吹田分館 ——

薦田 憲久 (工学部・教授)

ペトリネックによる離散事象システム論

熊谷貞俊、薦田憲久共著

(コロナ社 1995)

システムのモデリングとシミュレーション

薦田憲久、大川剛直共著

(計測自動制御学会 1995)

木村 實 (健康体育部・教授)

Functions of the cortico-basal ganglia loop. Ed. by Minoru Kimura et al.

(Springer-Verlag 1995)

榎木 享 (工学部・名誉教授)

Coastal engineering-waves, beaches, wave-structure interactions (Developments in geotechnical engineering, 78) Ed. by T. Sawaragi (Elsevier 1995)

松林 玄悦 (工学部・教授)

化学結合の基礎 松林玄悦著

(三共出版 1995)

足立 吟也 (工学部・教授)

個体化学の基礎と無機材料 (化学教科書シリーズ) 足立吟也著 (丸善 1995)

鳴海 邦碩 (工学部・教授)

阪神・淡路大震災被害実態緊急調査 被災度別建物分布状況図書 日本都市計画学会関西支部・日本建築学会 近畿支部都市計画部会<震災復興都市づくり特別委員会> 鳴海 邦碩編 (沿岸域環境研究所 1995)

飯田 孝道 (工学部・教授)

英語で書く科学・技術論文 飯田孝道他著 (東京化学同人 1995)

長谷川 晃 (工学部・教授)

基礎原理にもとづく工学系の電磁気学

長谷川晃著 (岩波書店 1995)

Solitons in optical communications (Oxford series in optical and imaging sciences, 7) Ed. by Akira Hasegawa

(Oxford Univ. Pr.)

首藤 勝 (基礎工学部・教授)

日本ソフトウェア科学会 第11回大会論文集

日本ソフトウェア科学会編

(日本ソフトウェア科学会 1995)

藤田 正憲 (工学部・教授)

自然環境の復元をめざして 地下水・土壌汚染の現状と対策 日本水環境学会関西支部編 1995) (環境技術研究協会 1995)

紙野 桂人 (工学部・教授)

これからの安全都市づくり 阪神・淡路大震災の教訓を踏まえて 紙野桂人監修

(学芸出版社 1995)

阿部 信晴 (工学部・助教授)

地盤の科学 地面の下をのぞいてみると... (ブルーバックス B1088) 阿部信晴他著 (講談社 1995)

赤木 新介 (工学部・教授)

新交通機関論 社会的要請とテクノロジー 赤木新介著 (コロナ社 1995)

岡田 博美 (工学部・助教授)

コンピュータの基礎知識 基礎からシステム / ネットワークまで 岡田博美編著 (昭晃堂 1995)

—— 生命科学分館 ——

北村 幸彦 (医学部・教授)

Biological and molecular aspects of mast cell and basophil differentiation and function. Ed. by Yokihiko Kitamura et al. (Raven Pr. 1995)

木村 實 (健康体育部・教授)

Functions of the cortico-basal ganglia loop. Ed. by M. Kimura et al. (Springer-Verlag 1995)

—— 人間科学部図書室 ——

中島 義明 (人間科学部・教授)

情報処理の心理学 中島義明著

(有斐閣 1995)

■■■■■ 会 議 ■■■■■

生命科学分館運営委員会

7.12. 6. (水) 13:00~15:00

(生命科学分館会議室)

1. 平成8年度生命科学分館資料費部局分担について、委員長から分担内訳案が提案され、審議の結果、部局に持ち帰り再度検討の後、年度内の委員会に諮ることとなった。
2. 分担金による購入雑誌の見直し方法について協議した。その結果、国内雑誌も含めたいうで、平成8年2月末までに関連部局各講座宛に対して調査を実施し、集計結果をみて今後の方策を検討していくことが了承された。

分館長会議

8. 1.10 (水) 13:00~13:20 (本館会議室)

1. 図書館委員会の進行について協議した。

図書館委員会

8. 1.10 (水) 13:35~15:20 (本館会議室)

1. 本館新築計画の見直しについて審議し、基本構想案が承認された。
2. 電子的情報資料の収集について審議した。

生命科学分館運営委員会

8. 2.26 (月) 13:00~14:00

(生命科学分館会議室)

1. 平成8年度生命科学分館資料費部局分担について、原案通り承認された。また、平成9年度から医学部保健学科の分担金負担に伴う覚え書きについての申し合わせ案、及び負担内訳案についても了承された。
2. 医学部保健学科の移転に伴う運営委員会の構成について、平成8年度より保健学科からの運営委員会への参画を協議した結果、医学部として3名の委員を認めることが了承された(従来は2名)。

なお、これに伴う規程改正等については分館長に一任された。これに関連して、図書選定小委員会の内規についても改正案を審議し、保健学系から委員1名の選出が了承された。

吹田地区運営委員会

8. 2.29 (木) 10:30~11:20 (吹田分館会議室)

1. 次期吹田分館長候補者選考の結果、興地斐男工学部教授が選出された。

■■■■■ 日 誌 ■■■■■

H 7.12. 5	生命科学分館運営委員会	(生命科学分館)
12. 8	近畿地区医学図書館協会例会	(生命科学分館)
12.19	本館新築計画検討ワーキング・グループ	(本館)
H 8. 1.10	分館長会議	(本館)
	図書館委員会	(本館)
1.17	日本医学図書館協会総務会	(東京慈恵会医科大学)
1.18	国立大学附属図書館事務部長会議	(一橋大学)
1.22	日本医学図書館協会第67回総会組織委員会	(兵庫医科大学)
1.29	図書館情報システム特別委員会	
	次期電算化システム専門委員会	(東京大学)
2.20	図書館情報システム特別委員会目録システム専門委員会	(京都大学)
2.21	課金委員会	(学術情報センター)
2.26	生命科学分館運営委員会	(生命科学分館)
2.29	吹田地区運営委員会	(吹田分館)